ISSN 1345-6504

神図協 会報 April No.246

神奈川県図書館協会 2014年（平成26年） 4月1日発行

http://www.kanagawa-la.jp

Kanagawa Library Association

巻頭言 国立国会図書館におけるデジタル化資料送信サービスと今後の展開
—知の共有化と新たな知の創造を目指して— ・・・・・・・・・・・・・・・ 1
特集１：図書館におけるデジタル化資料の活用
国立国会図書館デジタル化資料送信館の参加館になりました ・・・・・・・・・・・・ 2
麻布大学のリポジトリ『azabook』と博士論文のインターネット公開について ・・・ 2
連 載：わたしのイチオシ 横浜市中央図書館 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
特集２：神図協 この１年の動き（郷土・出版委員会、大学図書館委員会、研修委員会、広報委員会）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5～6
研修レポート⑧「国会図書館見学・研修」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
⑨「高齢者サービスについて」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

国立国会図書館におけるデジタル化資料送信サービスと今後の展開

—知の共有化と新たな知の創造を目指して— 国立国会図書館電子情報部長 中山 正樹

国立国会図書館（NDL）は、新たな図書館向けサービスとして、当館がデジタル化した資料のうち、絶版等の理由で入手が困難な資料を、公共図書館・大学図書館内で閲覧・複写ができる「図書館向けデジタル化資料送信サービス」を開始しました。当館による資料のデジタル化は、当館が収集した原資料を文化財として保存するとともに、デジタル化により利活用の機会を拡大することを目的としています。現時点において、当館が保有する資料のうち、和図書90万点、古典籍9万点、和雑誌107.5万点、博士論文14万点等、計230万点をデジタル化しました。このうち著作権が切れているもの48万点は、既にインターネットで公開しており、残りの182万点は従来、当館施設内でのみ閲覧可能でしたが、今回のサービス開始により131万点については、当館に来館しなくても、近くの公共図書館・大学図書館等の端末で閲覧できるようになりました。これにより著作権が切れていない絶版本の利活用の機会が拡大するとともに、利用統計を公開しますので、図書館等での閲覧頻度の高い資料は、出版社においてプリントオンデマンド（POD）、電子書籍等で復刻されることも期待されます。

このサービスを含め当館の電子図書館サービスでは、資料を文化財としてあらゆる人々が将来にわたって享受、活用できるようにするため、資料のデジタル化、インターネット情報の収集（WARP）及び電子書籍・電子雑誌等の収集（e デポ）に取り組み、当館の保有する資料を提供するとともに、国内の各機関が分散して保有する情報資源を活用するための統合検索サービス（国立国会図書館サーチ）を提供しています。今後は、これらの事業を発展させ、デジタル化された記録・記憶の本文内容で関連付け、知識として共有化を図り、新たな知識の創造活動に活用できる「知識インフラ」を構築しようと考えています。「NDL 東日本大震災アーカイブ（ひなぎく）」は、知識インフラ構築の先行事業と位置付けています。

デジタル化資料送信サービスを含めて情報の利活用の機会を拡大させるサービスと、新たな知識の創作活動を支援するサービスにより、著作者、出版社、将来にわたる利用者のそれぞれに利益が享受される形で共存共栄し、知識が国の文化財として蓄積していくことを目指しています。

特集１：図書館におけるデジタル化資料の活用

国立国会図書館デジタル化資料送信館の参加館になりました

藤沢市総合市民図書館　中戸川　陽子

私が人事異動で図書館に来たのは３年前です。貸出サービスの参考調査担当になりました。前にも図書館勤務の経験があり国会図書館関連の業務を担当していました。

異動後、日常の業務ではレファレンスを受ける件数が増えているように感じました。難解なレファレンスが途切れることなくやってきます。今はネット検索でたくさんの情報が得られます。最初の年は国会図書館のレファレンス協同データベースを活かしたいと思い、休止していたレファレンス事例を参加館としてデータ登録を再開しました。昨年の６月には国会図書館の歴史的音源の参加館登録を申請し承認されました。

国立国会図書館のホームページから得る情報は、図書館運営に重要なものと考えていましたので、アンテナを張っていたところ、今回の国会デジタル化資料送信サービスが開始されることを知り、自主的に説明会に参加しました。

説明会に参加して、この内容なら当図書館でも可能なのではと思ったので、申請のための準備を始めました。10 月からの受付に一番で間に合うように書類等を整え、申請書を発送したのは 10 月も中頃になりました。

申請してから１ヶ月を過ぎたころ、申請書を受け付けましたというメールがありました。その後に追加書類を送付し、書類審査を経た後ネットワークの疎通確認の依頼があり、当館のシステム担当者にその準備をしてもらい無事疎通しました。12 月に承認書の送付があり、1 月 21 日の公開の日を待つことになりました

図書館内部ではチラシの作成やホームページのアップの準備や実際の受付のしかたを検討することなど準備をする必要がありましたが・・実は 21 日の公開の日には準備万端とは、なりませんでした（予想を裏切り、と反省！）。また公開の日、予定通りに繋がらず、困惑しているところへ、準備のため既に国会からの指示がされていたようで IBM の職員が朝から訪問してくださいました。お蔭様で無事開通いたしました。

待っていたかのように利用者がやってきました。資料の閲覧そして複写もされて喜んで帰られました。「国会図書館に行かなくても、また国会図書館に複写申込をしなくても良いんだ」と利用者の感想。初日は２人の利用者がありました。問い合わせも多く、準備不足を反省する暇もなく、受付簿・受付要領・複写申込書の整備等、参考調査担当の専門業務員４名とともに急に忙しくなりました。昨今のＩＴ時代、個人での調査研究はネットを活用して国会図書館の資料にも目を向けている人が多いと感じる日々です。県内では藤沢市が唯一（１月 21 日現在）ということもあり登録利用者以外の方からの質問や他の公共図書館からも問い合わせがありました。

国会図書館のデジタル化資料の閲覧・複写が国会に行かなくてもできるという送信サービスの開始に参加館として承認され、またこのサービスを待っていた利用者がいたことを身近に感じることができて、必要性を感じるとともに利用者サービスの拡大ができたことに感激を覚えました。

（広報委員会追記）

神奈川県内で平成 26 年４月現在、閲覧・複写サービスを提供している館は以下の通りです。

- **神奈川県立図書館**
- **神奈川県立川崎図書館**
- **藤沢市総合市民図書館**
- **横浜市立図書館（以下の 17 館）**
  - **旭図書館　◦ 泉図書館　◦ 磯子図書館**
  - **◦ 神奈川図書館　◦ 金沢図書館　◦ 港南図書館**
  - **◦ 栄図書館　◦ 瀬谷図書館　◦ 中央図書館**
  - **◦ 都筑図書館　◦ 鶴見図書館　◦ 戸塚図書館**
  - **◦ 中図書館　◦ 保土ヶ谷図書館　◦ 緑図書館**
  - **◦ 南図書館　◦ 山内図書館**

（国立国会図書館作成参加館一覧より）

麻布大学のリポジトリ『azabook』と博士論文のインターネット公開について

麻布大学附属学術情報センター　増田　雄一

平成 16 年の千葉大学の仮公開を皮切りに、わずか 10 年で日本国内のリポジトリは飛躍的な成長を遂げた。平成 26 年２月末日時点で、日本国内のリポジトリ公開機関数は 400 を越え、公開されているコンテンツ数は 130 万件に届く勢いである。(国立情報学研究所調べ)

リポジトリとは、研究成果を公開するインターネット上の書庫のことである。学術雑誌の高騰に伴い、年々、入手が困難になっていく研究成果に対して、誰でも制約なくアクセスできる環境（オープンアクセス）を実現する方法のひとつとして、米国、英国を中心に議論され、世界的に急速な拡大を見せている。加えて、リポジトリの役割には、大学が生み出す紀要論文等の研究成果を国内外に情報発信し、大学の存在感をアピールすることが挙げられるが、本稿で取り扱う博士論文のインターネット公開はこれに該当する。

(1) 麻布大学のリポジトリ『azabook』の運用開始と博士論文(遡及分)のインターネット公開について

本学では、平成 24 年 10 月より、リポジトリの運用を開始した。その名も『azabook』（「麻布」＋「Book」というシンプルで覚えやすい名前！？）。リポジトリシステムは、いまや全国 195 機関(平成 26 年 3 月 12 日時点)で使用されている国立情報学研究所提供の JAIRO Cloud を採用した。当該システムの良い点は主に 3 つある。①システム管理に時間を割く必要がなく、コンテンツ制作に注力できること、②JAIRO Cloud フォーラムという参加機関向けの操作方法等に関する問合せをできる環境が用意されていること、③無償であること、である。画面カスタマイズは自由にでき、必要なモジュール（コンテンツ表示、お知らせ、リンクなど）を任意に組み合わせることができる。

次にコンテンツ制作であるが、CiNii にフルテキストのコンテンツを登録している場合、国立情報学研究所から当該データの提供を受けることができる。本学では、紀要論文「麻布大学雑誌」の Vol.1/2～15/16 の提供を受け、記念すべき初のリポジトリコンテンツとして登録・公開した。

上述のように、国立情報学研究所の御支援により、『azabook』の基盤ができたところで、いよいよ独自のコンテンツ制作に取り組むことになる。はじめに手掛けたのは、過去に学位授与された博士論文であった。

本学における博士論文のコンテンツ制作のステップは主に 3 つである。①著作権者からの許諾処理、②冊子体の博士論文のデジタル化及びメタデータ作成、③コンテンツの登録・公開作業、である。まず、①について、著作権者(著者本人又は出版社・学協会)から、デジタル化する権利である「複製権」とインターネット上で公開する権利である「公衆送信権」の 2 つの権利の許諾を得る必要がある。作業当時、京都大学のリポジトリ「KURENAI 紅」において、ノーベル生理学・医学賞受賞のもととなった iPS 細胞研究の論文が公開されていた。リポジトリのイメージを膨らませやすくする良い事例と考え、著作権許諾の依頼文に参考事例として記載したが、リポジトリが新たな事業であり、世の中に浸透していないことを考えれば、このように伝える工夫をすることは重要であると思う。次に②について、デジタル化及びメタデータ作成を業者に依頼するため、仕様書を作成したが、その際に主に 2 つのこだわりを盛り込んだ。ひとつは、余白部分の除去や水平・垂直、裏面の写り込みのチェックなどの詳細な条件を設け、見栄えの良いデジタルデータとすること、もうひとつは、タイトル名や著者名、取得学位等の基本的な書誌情報に加え、要旨・Abstract の全文もメタデータの対象として、キーワードによる検索力を向上させること、である。さらに、博士論文の現物 1 点 1 点を 1 ページずつ確認し、個別に最適なスキャニング方法（カラー又はモノクロ若しくはその混合）を指定する作業も行った。最後に③について、業者から納品されたデータを、1 点 1 点、現物と照合しながら、徹底的に検証し、幾度かの修正を経た後、「azabook」に登録・公開した。当該作業を通じて、印象に残ったのは、その反響のすごさであった。博士論文以外の研究成果の公開を逆依頼されたり、論文内容について、熱のこもった解説がしたためられた手紙をいただいたりと、授与後数年、はたまた数十年経過しているにもかかわらず、今も冷めやらぬ熱がそこにはあり、励まされる思いであった。作業の結果、192 件の博士論文の公開に至ることができ、ノウハウも蓄積されたわけだが、この経験が次に活きることとなる。

(2) 学位規則改正後の博士論文のインターネット公開について

平成 25 年 3 月 11 日に学位規則が改正された。内容は、平成 25 年 4 月 1 日以降に学位授与された博士論文は原則として、リポジトリによるインターネット公開を行う、というものである。リポジトリの運用は、図書館で行われているのが一般的であるが、学位を担当するのは教学系の部門であるため、相互の協力が必要不可欠である。本学も御多分に漏れず、教学系の学生支援課と幾度かの調整を経て、学位規則と業務フロー、申請書の改正を行った。この調整の結果、博士論文の一部が学術雑誌に投稿されている場合の著作権の許諾処理は図書館（本学においては学術情報センターの図書担当）が担うことが明確化された。博士論文のインターネット公開は、著者本人に義務づけられているため、著作権処理を著者本人に委ねている大学も多い。そのような中、図書館が著作権処理を行う取り組みは先進的なものといえる。具体

的には、出版社や学協会の著作権ポリシーの確認若しくは直接の問合せを行うわけだが、特に海外への問合せの際は一から説明を要することが多く、また、２か月以上も交渉が続くケースもある。このような業務を経験すると、博士論文１点１点に対して、愛着が沸いてくるもので、気づけば、私の足は博士論文の発表会に向かっていた。そこでは、学位申請者が幾重もの練習を経たプレゼンテーションで数年を要した研究成果を伝え、聴衆である教員が幾多の質問を投げかけていた。「次の研究の展開はどうなのか」、「社会にどのように還元するのか」etc。博士論文の発表会は研究者たちの熱気を帯びたものであり、博士論文とともにその熱もリポジトリを通じて発信されることを願いながら、登録・公開している。

『azabook』は運用開始後、１年半を経過しようとしているが、まだまだ課題も多い。CiNii 等とより効率的に情報連携を行うためのメタデータ構成の検討が必要であるし、博士論文以外にも掘り起こされる時を待っている研究成果がたくさんある。いずれは胸を張って、麻布大学の研究成果は全て『azabook』で公開されている。そう言え（azabook はコチラから → https://az.repo.nii.ac.jp/）るように取り組み続け、そして、研究成果を積極的に情報発信することで、大学の役割のひとつである社会貢献に寄与できればと考えている。

連載：わたしのイチオシ　『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書マイクロ版集成』
（横浜市中央図書館）

90 年を超える歴史を有する横浜市立図書館は、幸いなことに戦災の直接的な被害を免れたため、古い資料を多数所蔵しています。しかし、所蔵しているとはいえ、足りない部分もあり、その空白を古書等で補っていくには限界もありました。そこで、今から 20 年ほど前の中央図書館開館時に、『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書マイクロ版集成』を受け入れました。

これは国立国会図書館の所蔵する明治期に刊行された図書約 11 万点･16 万冊分を 15,536 リールにマイクロ化したもので、明治期に刊行された全図書の約 7 割に相当するものです。

まさに 16 万冊といえば、公共図書館 1 館分の蔵書数にさえ匹敵する冊数です。横浜市でいえば金沢図書館や都筑図書館の蔵書並みの数字です。

このマイクロフィルムは「歴史」「伝記」「哲学」等 28 の部門に分けられ、それぞれの部門ごとに冊子体の目録があります。また CD-ROM で検索することもできます。

全国の公共図書館で 28 に及ぶ全部門のマイクロフィルムを所蔵している図書館は無いと思われ、大学図書館でさえも、全部門を持っている館はほとんどないのではないでしょうか。

マイクロフィルムはカセット式で、閲覧の際は専用のマイクロフィルムリーダーを使用します。カセット式なので装填は簡単、目的の箇所を探すのもたいへん容易です。もちろんコピーもできます。

現在では国立国会図書館の近代デジタルライブラリーでこれらを閲覧できるようになっていますが、一自治体の公共図書館の資料として所蔵していることは「イチオシ」ではないでしょうか。開港地横浜の市立図書館が、近代化を目指した明治期の資料を所蔵していることは、意味のあることと思います。　　（調査資料課　望月　和彦）

特集２：神図協　この一年の動き

郷土・出版委員会

郷土・出版委員会では、３年ぶりの刊行物となる『神奈川県皇国地誌残稿所在目録』を平成 26 年３月に刊行しました。

今年度３回開催された会議では、目録のタイトル決めから始まり、章立ての精査、目録記載の問い合わせ先の確認等を行ないました。また、各自治体に対して、記載内容の最終確認をお願いする調査を行いました。続いて、凡例及び索引について用語の訂正を行いつつ編集作業を進めました。第１章「県内各自治体へのアンケートによる皇国地誌残稿所在目録」と第２章「皇国地誌残稿掲載の刊行物一覧」の語句とレイアウトの統一を図り、少しでも検索がしやすいように工夫しました。

平成 17 年度に行なった県内自治体へのアンケートを元にしたこの目録は、平成 24 年度の２回目のアンケート調査を経て、できるだけ現況に近い県内の所在、及び刊行物一覧の目録として仕上げることができたのではないかと思います。ここに２度に渡りアンケートに答えていただき、さらに最終確認の調査に協力していただいた各自治体の担当者にお礼を申し上げます。

今年度のもうひとつの課題としてあげていた、郷土・出版委員会の今後のあり方についても協議してきました。

かつて郷土資料編集委員会が 13 輯まで出版していた、県内各自治体の郷土資料を編集・翻刻する『神奈川県郷土資料集成』の継続刊行は、会員館の現状の職員体制では大変困難で、また、今回の目録の第２章「県内皇国地誌残稿刊行物一覧」に見られるように、各自治体の皇国地誌残稿が多く刊行物として手に取れるようになってきました。

そこで、各自治体の郷土資料の編集・翻刻は市史・町史編さん担当にゆだね、郷土・出版委員会としては、統合される以前の書誌委員会が行なっていたような、本協会独自のレファレンス・ツールの作成を今後行なっていくのが、郷土・出版委員会の役割ではないかとの話し合いを持ちました。

平成 26 年度は、会員館の郷土資料を取り巻く現状把握につとめ、課題を探りつつ具体的にどのような書誌を編さんしていくのかを、各委員の協力を得ながら検討していきたいと思います。

［委員長　大磯町立図書館　佐藤　聡］

大学図書館委員会

大学図書館委員会では、調査研究テーマを２年度毎に定め、大学図書館が抱える時節を得た課題に対して調査し、意見交換と共通認識を深め、図書館活動に繋げています。

今期（平成 25～26 年度）は、新たに決定された教育振興基本計画の中で大学図書館に対して「学生の主体的な学修の基盤となる図書館の機能強化」が求められたことを受けて、「学生の主体的な学びを支援する大学図書館」をテーマに取り上げました。大学図書館には数年前からラーニング・コモンズの設置が進んできていますが、より良い人材育成のために大学図書館でどのような支援ができるのか、考えられるのか、その運用について事例収集・調査・研究に取り組んでいます。

また、神奈川県内の大学図書館が抱える課題として、複数の図書館関係組織が設置され事業の重複も見受けられるという現状があります。例えば、神図協には大学・短期大学合わせて 36 館が、神奈川県内大学図書館相互協力協議会には 43 館が加盟していますが、その両方の組織に参加している図書館も相当数あります。

この課題については、昨年から、組織の簡素化や相互利用の拡大などを調査研究して、神奈川県内における大学図書館の相互協力活動と連携を強化し、図書館活動の活性化に繋げていくことを検討することとしております。今年度は、実践的な試みとして、研修会を神奈川県内大学図書館相互協力協議会と共催いたしました。平成 25 年 10 月４日（金）防衛大学校を会場とし、「大学へのビブリオバトル導入とその効果」の講演と会場校の見学を行い、実務担当者間の交流を深めました。当日は、31 館 38 名の参加がありましたが、そのうち 27 館は両組織の加盟館でした。このことから、当委員会としては、両組織の統合などによる組織の簡素化と、活動の活性化を同時に進めていく可能性が開けたのではないかと考えております。

今後も、当委員会では上述の研究テーマについての調査・研究と課題の解決に向けて取り組んでまいります。協会事務局及び加盟館のみなさまのご協力を引き続きお願いいたします。

［委員　神奈川大学図書館　堀江美由紀］

研修委員会

研修委員会では、10 回の研修会を開催しました。開催日、テーマ、講師は以下の通りです。

詳しい報告はホームページをご覧ください。
（http://www.kanagawa-la.jp/）

回数	テーマ 講師（敬称略）	開催日
第１回	障害者サービス ～図書館でできること～ 姉崎 久志（「サピエ」運営委員会委員）	7/11
第２回	川崎市立中原図書館（施設見学）	9/20
第３回	ＣＤ･ＤＶＤの構造と修理について 古田 道人(メディアフィックス代表)	9/26
第４回	ワークショップ 図書館の“企画”を考える 舟田　彰（川崎市生涯学習推進課）	10/10
第５回	［第 15 回図書館総合展］ 学校図書館は学校教育のインフラ 高鷲 忠美　（八洲学園大学教授） 高宮 光江　（国際子ども図書館司書）	10/30
第６回	立教大学池袋図書館(施設見学)	11/20
第７回	子ども読書活動推進フォーラム （県立図書館との共催） 末盛千枝子 (『3.11 絵本プロジェクトいわて』主宰)	12/21
第８回	国立国会図書館東京本館（見学研修）	1/24
第９回	図書館の可能性を拓く ～高齢者サービスの視点から～ 小林　卓　（実践女子大学准教授）	2/7
第 10 回	紙芝居講習会 ～もっと紙芝居を楽しくしよう！～ 橋口　英二郎（童心社）	2/13

今年度、新たに委員となり、手探りな状態でのスタートとなりましたが、各研修会には多くの方にご参加いただき、テーマの選定の大切さを実感しました。今後も多彩な内容で、充実した研修会を行えるよう力を合わせて取り組みたい思います。

最後になりましたが、会場提供や講師派遣などさまざまな形でご協力いただきました加盟各館並びに関係者の皆様に改めてお礼を申し上げます。

［委員 相模原市立相模大野図書館 遠藤 恭代］

広報委員会

広報委員会では協会報の発行、ホームページの管理、図書館総合展での展示を行いました。活動の内容は次のとおりです。

1　協会報の発行（年４回発行）

昨年度 240 号までは印刷配布してきた協会報ですが、現在は加盟館へＰＤＦで配布するようになっています。これにより今年度も編集会議は年３回にすることができ、ホームページのグループウエア機能を活用して情報交換等を進め編集・校正を行いました。

また、245 号からは、新たに「わたしのイチオシ」の連載を開始し、会員各館の自慢の一品を紹介していただくこととなりました。

○243 号（７月１日発行）
平成 25 年度神奈川県図書館協会総会報告

○244 号（10 月１日発行）
特集：郷土・地域資料の収集と活用

○245 号（１月１日発行）
特集：第 15 回図書館総合展フォーラム報告
わたしのイチオシ：土地宝典（公文書館）

○246 号（４月１日発行）
特集：図書館におけるデジタル化資料の活用
神図協　この１年の動き
わたしのイチオシ：明治期刊行図書集成
マイクロ版（横浜市中央）

2　協会ホームページの管理運営

ホームページのアクセス件数は H24 年７月のリニューアル以降、累計で９万件を超えました。また、会員専用ページを利用するため、全会員共通のＩＤ､パスワードを発行したほか、「神奈川の図書館 2013」をホームページにアップし、会員が手軽に活用できるようにしました。

3　第 15 回図書館総合展におけるブース展示

10 月 29 日（火）～31 日（木）の期間、昨年と同様にパシフィコ横浜で開催されました。

今年度は神奈川県図書館協会の各委員会の活動をパネルで紹介し、協会の刊行物や各種パンフレットなどを展示しました。また、ブースを共にする神奈川県資料室研究会とあわせた形で、「県立の図書館機能の見直し案に対する要望書」もパネルで展示しました。ブースの来場者は３日間で合計 316 人でした。

［委員　川崎市立中原図書館　小島　久和］

研修会レポート⑧　「国会図書館見学・研修」

（平成 26 年 1 月 24 日実施）

１月 24 日（金）、国立国会図書館東京本館の見学・研修を開催しました。

始めに、国立国会図書館の概要についての DVD（約 15 分）を視聴し、その後、２班にわかれ、館内を案内していただきました。

館内見学は、２階のカウンターやフロア、地下８階、地下６階の書庫などの見学でした。地下８階の書庫では、逐次刊行物（雑誌）について、地下６階では、マイクロフィルムなどの実物を見ながら、保存の目的、保存対象や保存方法の考え方について説明を受けました。

午後からは研修として、「国立国会図書館サーチ」と「資料デジタル化に係る業務説明」についての講義でした。

「国立国会図書館サーチ」では、課題を検索する実習形式の研修を行いました。

実習課題は、

１、「横浜」に関するデジタル化資料を探す。

２、「大黒歯」「恵比寿歯」に関する論文を探す。

３、川崎市の平成 21 年の路線価図（財産評価基準書）を入手したい。

以上の課題に取り組みました。

続いて、「資料デジタル化に係る業務説明」についての講義でした。

国立国会図書館では、資料のデジタル化について、資料の利用と保存の両立を図ることを目的に、所蔵資料の媒体変換を実施しています。平成 21 年度以降の媒体変換は、原則としてデジタル化により実施しているとのことでした。

また、今後の資料のデジタル化についての基本方針についても説明を受けました。

財源の確保に努め、所蔵資料のデジタル化を進め、デジタル化した資料の提供により原資料を保存し、検索の利便性や障害者を含むあらゆる人々の利用可能性を高め、関係機関等との有機的な連携により知識・文化の基盤を構築して行くという考え方が元になっています。新たにデジタル化を行う資料は国内資料とし、図書については、昭和 55（1980）年までに刊行されたものを当面の対象範囲としています。ただし、外国資料についても、希少性の高い資料、歴史的価値の高い日本関係資料はデジタル化の対象となります。また、対象資料の選定は、①唯一性・希少性、②資料の劣化状況、保存の緊急性、③資料の利用機会の拡大、④デジタル化への社会的ニーズ及び ⑤国や世界の体系的なデジタルコレクション構築への貢献。以上の評価要素により選定されるそうです。

平成 26 年１月から、国立国会図書館のデジタル化資料が、平成 24 年の著作権法改正により、全国の図書館（承認申請を受けた参加館）で利用できるようになります。

このサービスに関連して、デジタル化について理解を深めることができ、とても有意義な時間となりました。

［神奈川県立川崎図書館　吉田　顕治］

研修会レポート⑨　「高齢者サービスについて」

（平成 26 年 2 月 7 日実施）

２月７日（金）、横浜市中央図書館にて、平成25年度第９回図書館協会研修会を実施いたしました。今回は、実践女子大学の小林卓先生に高齢者サービスのポイントや、その重要性についてご講義いただきました。

まず、平成25年版高齢社会白書に基づいて、日本における、高齢者の現状についてのご説明がありました。その後、ご自身の著書の中より、聴覚と視力に障害を負われた親御様の読書体験についてお話くださいました。

高齢者には様々な障害を持たれている方も多く、拡大図書の配架や老眼鏡、筆談機、助聴器などの配備といった、ハード面でのサポートも重要であり、そのような工夫によって、高齢者が図書館を利用するハードルを低くし、また、高齢者対象のお話会や紙芝居、戦争体験を語り合うなどのイベントを充実させることにより、高齢者の余暇の充実や社会参加の手応え、ひいては生き甲斐を見つけ、健康維持や家族関係の改善といった社会的効果をも引き出すことができるというお話でした。これからますます進む高齢化に向けて、図書館の果たす役割について改めて考える機会となりました。

休憩後、横浜市中央図書館の吉田さんより、高齢者サービスの情報誌紹介がありました。「図書館と高齢者サービス」「高齢者への読み聞かせ・紙芝居などの参考資料」「シニアの図書館観」の３つの視点から、それぞれの内容に即した資料や論文、WEBサイトの紹介がありました。高齢者向けの紙芝居のリストや読み聞かせを実践している方、また、高齢者サービスに積極的に取り組んでいる図書館の実践例など、具体的な情報も紹介していただきました。

最後にグループに分かれ、高齢者サービスに関する情報交換と、今後のサービスのあり方についての討議を行いました。短い時間ではありましたが、それぞれの図書館での取り組みや考え方を直に伺うことができ、大変有意義な時間となりました。

参加された方のアンケートには、高齢者サービスについて見聞を広げることができ、研修で得た知識を今後の業務に役だてたいといった意見が多くよせられました。

［神奈川県ライトセンター　金井恵美子］